

## < 3月15日 家庭礼拝の手引き >

本日は、3月1日と同じ内容の主日礼拝プログラムでおこないます。インターネットに接続できる方は、ビデオ(30分)を見ながら礼拝を捧げることもできます。視聴方法はホームページより。

### 1. 礼拝の進め方

3月1日の週報を同封しています。そのプログラムに沿って、賛美を捧げ、祈り(祈りの課題参照)、聖書を読みます。説教の部分は、説教要旨を記した文章(後記)を読みます。

### 2. 礼拝プログラム

招 詞 詩編 127 編 1 節  
讃 美 歌 新生 670 主のみ名をほめまつれ  
主の祈り  
聖 書 テサロニケ I 2 章 13-16 節(新 375 頁)  
説 教 「神の言葉として」  
祈 禱  
賛 美 歌 新生 230 丘の上に立てる十字架  
黙 禱

### 3. 祈りの課題

- 新型コロナウイルスの感染が収束し、苦しみと不安の中にある人が守られるように。安心して通常の礼拝を捧げることができますように
- 教会員、教会に連なる方々が、それぞれのご家庭で家庭礼拝を捧げ、信仰と愛と一致が守られるように
- 東日本大震災・福島原発事故から 9 年を迎え、故郷を追われている方、苦しみ悲しみそして不安を抱えた方々のために
- レントの期間にあたり、主がわたしたちのために苦難を受けられたことを覚えて。主の復活を喜び、イースターを迎えることができるように
- 日本、中国、韓国をはじめ全国で感染に苦しむ人々のために。全世界の教会の礼拝のために
- 教会に連なるご高齢の方、お一人暮らしの方、施設に入所されている方のために

### 4. 説教要旨

#### 1. 創立記念礼拝

本日、1931年の教会設立から89年目を記念し、創立記念礼拝を捧げます(週報参照)。教会を導いて下さる神に感謝し、信仰の先達の歩みに続いていく思いをもって、礼拝を捧げましょう。

#### 2. テサロニケの教会の人々

パウロは第二回伝道旅行でテサロニケの教会を生みました。しかし、妨害により3週間ほどしか滞在できませんでした。その後パウロは、この教会が心配でたまらず、テモテを遣わし調べさせました。テモテは、しばらくして戻ってきて、“テサロニケの教会の人々は、あれほどの妨害や危険にもかかわらず、イエスを救い主と信じる信仰を堅く保ち、それだけでなく、愛のために労苦し、希望をもって忍耐していた”と報告したのです。パウロは喜び、感謝し、彼らに励ましの手紙を送りました。それがこの手紙です。

キリスト教信仰は、労苦、忍耐によって深められていきます。苦難の中で、厳しい現実を忍耐する中で、“本当の救いとは何か、神は何をお考えなのか”と、神との葛藤が起こされ、神への理解が深められ、信仰の深みに招かれるのです。テサロニケの教会は、愛のために労苦し、希望をもって忍耐していたのです。

先週、2章の前半部分を読みました。パウロは“取るに足りない自分のような者が神に選ばれ、福音を委ねられた”その喜びが、迫害の中で宣教する動機であると言います。人に喜ばれるためではなく、わたしの心を吟味される神に喜んでいただくために伝道する。そして、ただ伝えるばかりでなく、自分の命さえ喜んで与えたいと願うほど、「あなたがたはわたしたちにとって愛する者となったのです」。

### 3、「人の言葉」としてではなく、「神の言葉」として受け入れた

2章13節、「このようなわけで、わたしたちは絶えず神に感謝しています。なぜなら、わたしたちから神の言葉を聞いたとき、あなたがたは、それを人の言葉としてではなく、神の言葉として受け入れたからです。事実、それは神の言葉であり、また、信じているあなたがたの中に現に働いているものです」。

パウロからイエスの愛と救いの福音を聞いた時、テサロニケの人々は人の言葉としてではなく、神の言葉として受け入れた、とパウロは言い切ります。実際にはパウロが語った言葉であり、人間の言葉です。しかし、それが「神の言葉」として受け入れられていくという変化が起こったというのです。神さまの御心がそこにあると思わざるを得ないほどの「迫り」をもって受け止められたということなのでしょう。

わたしたちも、時に、同じような体験をすることがあります。人が語った言葉に過ぎないのに、神さまがわたしにこのことを大切にしろよ、と教えてくださったとしか思えない出会いがあります。そのような神との出会い、人間を超えたところの大切な、聖なるお方との出会いを伴うような出会いです。

### 4、「神の言葉」は現に信じる者の中で働く

なぜ、パウロはテサロニケの人々が神の言葉として受け止められたと断言できたのでしょうか。

13節の後半「事実、それは神の言葉であり、また、信じているあなたがたの中に現に働いているものです」。神の言葉が、テサロニケの人々の中に現に生きて働いていると、パウロは感じたのです。それは、人間の言葉が無し得る業ではない。神の言葉が、あなたがたの中で生きている。そう言わざるを得ない神との出会いが起こされ、神の言葉が彼らを支えていると、パウロには思えたのです。

イエスさまの愛と赦し、救いの道は、わたしたちを命の根底から支えます。たとえ、わたしが苦難に襲われ、絶望し、の底に落ち、孤独であっても、十字架にかかってまで愛してくださる方がおられる。愛を受けるに値しない者を愛してくださる神がおられる。“その神が今、私の傍におられる”と思える時、人間の言葉が、神の言葉となり、その人の中で生きて働き、その人も愛のために労苦し、キリストに希望をおいて忍耐することが出来る人に変えられていくのです。苦しみが喜びに変わるのです。その時、人間の思いは昇華され、“神の言葉が私の中に働いている”ことを知る者とされるのです。今日も、わたしたちを造り変えてくださる「迫り」をもった神の言葉と出会い、“神の言葉が私の中で生きて働いている”、そんなわたしたちになっていきましょう。